

生命力とバイオアート

岩波 洋造

聞き手：佐多保彦 株式会社 東機貿 代表取締役社長

佐多：「バイオアート」という言葉は、やはりバイオロジーから来ているんでしょうね。

岩波：そうです。「バイオテクノロジー」と対比させると分かりやすいと思います。「バイオテクノロジー」は遺伝子を操作したりして、人間の科学ではできないようなことを生物に行わせる技術ですね。生物の自然の生命力と人間の知恵との共同作業です。例えばインシュリンというヒトのホルモンを菌類に大量生産させることが可能になっています。これと同じに、自然の造形に人間の感性で彩色しながら作品を作っていくと、今まで人間の力だけで作ってきた芸術作品とはひとあじ違ったものができます。これが「バイオアート」です。

自然の中にある植物や動物の形は何億年もかけて創りだされたものです。機能的に不都合があれば代を重ねる度に捨てられ、その結果得られた形は、完璧に造られた芸術品みたいなものです。一般の人はあまり顕微鏡の中の世界を見ていないと思いますが、顕微鏡写真に限らず、自然の造形の美しさや格調の高さには驚くべきものがあります。たかだか40年や50年の間に、人間が考え出す形やデザインが自然のものにかなうわけがありませんよね。

佐多：そのような造形は「生命力」によるものとも言えると思うんですが、先生は「生命」とはどのようなものと考えていらっしゃいますか。

岩波：短い言葉で説明するのは難しいですね。人間の力では、一つの細胞さえ作り出せません。それはコンピューターの何万倍も何百万倍も複雑なものです。無機物が非常にたくさん有機的に集まって、ある一定期間、食べて排泄して、また再び無機物になる、その期間が生命であると考えたら、機関車だって本質的には生物と変わりがなくなってしまう。DNAも純粋な科学物質ですし、生物が子孫を残すといっても、鉱物の結晶(例:水晶)などもやはり自然にふえてゆきます。オパーリンは「生命という言葉は、ごくありふれた言葉でありながら、謎めいた言葉である」と言っています。複雑だから生物と言うわけにもいかない



1926年、長野県生まれ。48年、東京高等師範学校理科卒。51年、東京文理科大学生物学科(現筑波大)卒。72年、横浜市立大学教授。87年同退官。名誉教授となる。理学博士。著書に『花粉学』、『ポーレン』、『生命のデザイン』、『バイオアート』など。88年インターナショナルスカーフコンペティションで特別賞。90年「花と緑の博覧会」でバイオアートギャラリーを開き、好評を得る。



「バイオアート(生命のデザイン)」は講談社より発売中

し……難しいですよ。

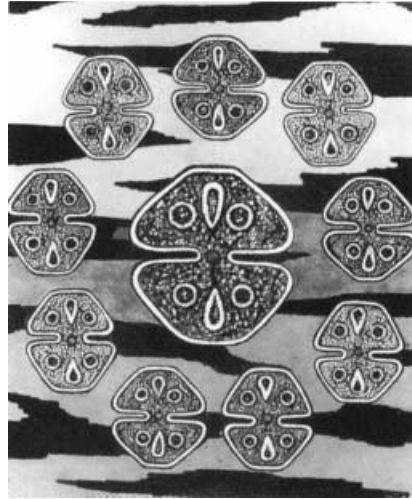
佐多：サイエンティストであった先生が、60才を境にアーティストに大転換なさったんですね。

岩波：よくそれを言われるんですが、僕はだいたい人間の一生はドラマだと思っているんです。たまたま与えられた大学の先生もとてもいい役だったが、30年もロングランしていると時には他の劇にもでてみたいと思うこともありました。そんな時に「バイオアート」という素晴らしい劇ができたので、今までの役は若い人に譲ることにしただけで、僕自身はちっとも変わっていないんです。

もともと、科学の研究の大部分は、自然の中にありながら今まで誰も気がつかなかったものを掘り出して、それを論文に書いて世の中に紹介するということでしょう。例えばキュリー夫人がX線を発見したといっても、彼女がX線を創り出したのではなく、X線の存在に気がついたということです。今まで誰も気がつかなかった美しい造形を顕微鏡で見て、それを写真に撮って世の中に紹介するというバイオアートの仕事は、科学の仕事と同じようなものなんです。

VITALITE

インタビュー



ツツミモを使った九角形の曼陀羅模様

ただ、科学には二面性があります。その進歩によって人間をいくらかでも幸せにすることができる反面、不幸にすることもできるんです。だから偉大な発見をすればするほど、人間を傷つける新しい方法を発見したことにもなります。その点で、科学と芸術とは基本的に違うと思います。

佐多：彩色は先生ご自身の感覚ですし、モンタージュのような合成した作品も多数ありますね。

岩波：全部で六千点になりましたが、全くの無手勝流なんです。展覧会や画集なども見ると真似をしてしまうので、できるだけ見ないようにしています。ある大学の絵の先生が、「絵は教えない方がいいんですね。」と首をひねっていました。モンタージュの作品は八割が神様が画いたもの、僕が画いたのは残りの二割といったところでしょうか(笑)。

佐多：ところで、先生は花粉研究の第一人者でいらっしゃるわけですが、そのご研究も大変ユニークですね。花粉はアルコールの中で10年も生きていますって？

岩波：そうなんです。10年間以上アルコール浸けにしておいたヤマユリの花粉が、まったく正常に発芽して花粉管を伸ばしました。本来、アセトン、フェノール、アルコール等の有機溶剤は、生物を殺したり弱らせたりする為に使うものです。この問題について生物学の研究者たちは「外は有機溶剤でも中は水で、膜によって隔離されているのではないか」と言うんですが、細胞膜はリン脂質が並んでいるプロポヨしたもので、有機溶剤にすぐく溶けやすいんです。僕たちが放射性の炭素を含むアセトンを使って実験してみたら、アセトンは完全に細胞の中に入っていました。入っているながら細胞膜が平気で残っているということは、少なくとも今の生物学では説明することができません。アルコールの中の花粉は、「生物によく似た物質の塊」で、外に出て水を吸わせると生命体になるんですね。生物から無生物へ、無生物から生物へということで、理論的にはこの方法で生物の生命を永久に保存できるということになります。

佐多：人間でもできるんでしょうか。

岩波：将来はできると思いますよ。いい加減世の中がいやになったら、「20年後に出してくれ」等と言い残してアルコールの中に入っちゃう(笑)。難しいのは人間の体から上手に水分を除いて有機溶媒と入れ替えることです。水と有機溶媒が同時に与えられるとダメらしいんですね。その証拠に、注射の時にアルコール消毒をしますが、あれは水でうすめて70～80%のものを便いますね。恐らくパストールの時代の人は、100%のものでは菌が生きってしまうことを知っていたんじゃないでしょうか。

これはあまりにも突飛な研究なので、面白いことは面白いんですが、これを認めたら「水の生物学」の常識が崩れてしまいます。とくに日本の学会では例え研究論文を書いても、レフェリーがとり上げてくれません。しかし、僕の仕事を追試してそれを認めてくれている北京大学の人達には夢を託しています。ちょうど西洋医学に対する漢方のように、彼らには西洋の生物学ではできないことができるのではないかなと思うんです。いまに世界中をびっくりさせるような仕事をやってくれるかも知れませんよ。

佐多：先生のお仕事は、少し早すぎるんでしょうか。

岩波：かもしれませんね。だから役に立たないことが多いんですが、バイオアートはいい時期にぶつかりました。カントは『判断力批判』の中で、「人間の造るものは模型であり、その原型が生物の体の中にある」という意味のことを言っています。この言葉が真実だとすると、人間は意識せずに生物の体の中にある原型を追い求めている。天才的な芸術家が一生かかってやっとたどり着いた形が、実は何万年も前から自分達の体の中にあるものだったということになりますよね。だからその原型にふれると人間は心地よさと親近感を覚えるのだと思います。しかもこれらの型は、人類の生まれる以前からこの世に存在していたものですから、私たちは毅然とした格調の高さを感じるのではないのでしょうか。だから、このような「神のかくし絵」を、僕が勝手に顕微鏡などを使って引きずり出しているのだろかなと思うことがあります。それが今の一番の悩みです。

NEW TECHNOLOGY

消化管粘膜内pH測定用 カテーテル「トノミータ」

千葉大学医学部救急部・集中治療部部长（助教授）
平澤 博之



1940年生。1971年千葉大学大学院
医学研究科修了。米国ニューヨーク
大学、エール大学留学後、千葉大学
医学部第二外科へ。1984年より現職。

従来、集中治療を必要とするような重症患者においては消化管の機能は低下すると考えられてきた。しかし、実は、活発な代謝活動を行っていることが研究によって明らかにされつつある。

また、消化管領域の血流量の低下は多臓器不全の原因となりうる等、消化管領域は重症患者の予後を左右する重要な働きをしていることがわかってきた。

しかし、消化管の状態を把握するよい方法がなかったため、救急集中治療領域では、従来より見過ごさざるをえなかった。近年、消化管粘膜内のpHを測定するトノミータが、その酸素代謝を知る簡便で有効な方法として開発され注目を集めている。

そこで、救急集中治療の現場でトノミータを活用していらっしゃる平澤先生に、お話を伺った。

**まず、救急集中治療の分野で、
トノミータを使用するようになった
いきさつを聞かせてください。**

平澤：そもそも、ICUにおいて、いちばん問題になるのは、生命予後を左右する急性多臓器不全をいかに避ける

かなのです。

多臓器不全の原因は大きくふたつに分けられます。ひとつは、体内で作られる液性因子のせい。もうひとつは、組織レベルでの酸素代謝の失調です。

特にふたつめの、重症病態における組織レベルの酸素代謝をどうやって調べるかに、私たちの関心がありました。これを調べるよい方法があれば、多臓器不全の原因のひとつを詳しく検討できますから、予防の可能性が生まれます。

今までも、測定は可能でした。右心房までカテーテルを入れ、動脈と静脈の酸素濃度を測って、差を割り出せばいいのです。この方法だと、組織酸素代謝以外にも得られる情報は多いのですが、いかにせん時間と手間がかかりすぎ、モニターとしての役割は果たせません。

そんな折り、組織レベルの酸素代謝を測るひとつの方法として、トノミータが発表されました。トノミータの発明者といってもよい、マサチューセッツ大学医学部のドクター・フィディアン・グリーンと話し、臨床データを拝見し、実際に使ってみることにしたのです。

トノミータの簡単な原理と、使用方法を教えてください。

平澤：胃、または結腸内に挿入したバルーンカテーテルのバルーンに、生理食塩水を注入し、平衡時間をおいて採取します。次に動脈血を採取します。そして、炭酸ガスの移行状態を公式に当てはめて計算します。これだけのことから、重症患者のベッドサイドで簡単に使えます。また、消化管の粘膜pHから、全身の酸素需要供給関係もわかりますし、消化管粘膜の血流状態も測定できるのです。

念のため、心臓カテーテルを使った方法で、トノミータの数値が果たして正しいのかを調べてみたことがあるのですが、ほとんど誤差もなく組織酸素代謝の概要、おおよその傾向を知るためには問題ないと思っています。

消化管でモニタリングするのは、とても有効なわけですね。

平澤：ええ。ご存知のように、消化管粘膜は、身体の中で侵襲を受けやすい、いちばん早く弱ってしまう臓器のひとつですから、これをモニタリングできることは救急集中医療の現場では、とても好都合なのです。わかりやすいいえば、ここがダメになり始めれば、みんな悪くなるだろう、と。ダメージの程度が、すぐに把握できるのですね。

従来、重症患者においては消化管はまるで役に立たないかわりに悪さもしない、サイレントオーガンと呼ばれていました。しかし、最近では積極的に悪さをするということが日本ショック学会でも明らかにされました。スウェーデンのハグランド先生は「消化管は多臓器不全発症のエンジンである」とさえ、明言しておられます。以前から私自身もハグランド先生の研究をよく知っていましたし、私たちの教室でも組織の酸素代謝に関する研究をしていました。アメリカのショック学会でも長い間の課題だったので、我が意を得たりの想いでした。つまり、消化管のモニタリングこそ、多臓器不全予防に重要な意味をもつというわけです。

また、一般的に救急外来でショック患者を診療するとき、血圧をあげることを救急蘇生法の第一義にするのですが、ブエノスアイレスで行った臨床試験において血圧ではなく、トノミータによるpH測定を指針にしたところ、蘇生による救命率が有意の差でよかったそうです。さらに、外国には、胃やS字結腸におけるガン性の変化を早期に知ることができるという論文もあります。

今後、おそらくこのモニターは普及していくでしょう。最近では救急医療に携わる医師たちの間でも認識が高まってきたという手ごたえを感じます。

トノミータを使うデメリットはありますか。

平澤：このモニターが登場するまでは、ある意味では測定しなくても間に合っていたわけですから、これを「手間がかかる」とみる医師もいるでしょう。

さらに、モニターが増えるとコストがあがります。教育的な面でいえば若い医師は機械に頼りがちになり、自ら把握する力が落ちるとの批判もあるかもしれません。

しかし、医師が把握しきれない部分を機械に細かくチェックさせるわけで、モニターは増えてよいと私は考えます。病態生理をよく理解することが、適切な処置につながるからです。患者の命を救うことを、第一に考えたい。トノミータを用いることによる臓器障害を未然に防ぐ可能性の方が、私には魅力的です。

モニターとしてのトノミータの将来性、そして救急医療、集中治療の将来をどうお考えですか。

平澤：以前から、組織の血流量を十分に保ちましようという考えはありました。そのための第一の指針は、血圧でした。

昔は救急車に積んであるのは血圧計だけでしたが、今では指先につけて酸素飽和度を知るためのパルスオキシメーターが積まれています。過去においては、麻酔中は、5分に一度の血圧測定だけが唯一のモニターでしたが、やがて心電図を、そしてパルスオキシメーターをつけるようになりました。医学の世界は、まさに日進月歩なのです。

新しく開発されたモニターであるトノミータが、今の形で救急車に積まれたり、血圧計にとってかわることはないかもしれませんが、組織酸素代謝測定は重症患者の管理において、近い将来、非常に重要な役割を果たすようになると思います。

私は、重症患者の治療に関しては、一人が治療方針を決めるのではなく、カンファレンスの機会をもち、医師たちが意見を出し合うことこそ大切だと思っています。一人だと見落としがちなのが、多くの目によって、見えてくる。モニターにも同様のことがいえるのではないのでしょうか。

いずれにせよ、大学病院に勤める私たちが、医学の未来を切り開いていくべきだと自負していますから、とにかく勉強あるのみです。リタイヤまで頑張るしかありませんね。

(文責:編集部)

NEW TREND

バイオサナトロジー 学会設立に向けて

土屋 健三郎



1921年、静岡県生まれ。1944年慶応大学卒。産業医学、衛生学専攻。慶応大学教授を経て'77年より産業医科大学学長。'92年3月退官。

去る5月9日、東京・竹橋においてバイオサナトロジー学会の設立発起人総会が開催された。そこで、発起人会代表を勤められる、元産業医科大学長の土屋先生にお話を伺った。

「生存の理法」を見直していく

佐多：このたび、バイオサナトロジー学会という新しい学会を設立なさったそうですが、その主旨をご説明いただけますか。

土屋：バイオサナトロジーという言葉は聞いたことがないだろうと思います。バイオロジーというと生物学ですが、バイオは広義には“生命”を意味します。また、サナトロジーとはギリシア語のサナトス(“闇の世界”の意)に由来していて、「死学」あるいは「死の科学」を意味します。その二つの言葉を結びつけて、生と死を一貫したものと捉えていこうというもの。つまりバイオサナトロジー学会の主旨は、生きることの意味と死ぬことの意味を同じスペクトルで考えていこうということだと思えますね。

佐多：日本語に訳すとどうなりますか。

土屋：「生死(しょうじ)の科学」でしょうか。かつて武見太郎先生が“生存科学”について打ち出されたことがあります。それによると、人間は自然の掟の中で生きて行くのであって、

その生存には理法があるという。ところが、かつては自然の理法に従っていた人類が、今は環境破壊などにみられるように理法を乱しているわけです。地球を細胞に例えると、表面だけでなく細胞膜の内部まで犯しつつある。これではいけない。生存の理法を守り、秩序の回復を図っていかねばならないだろうと。このあたりが、当学会の使命でもあるわけです。

佐多：生死を科学するということは、生きているとはどういうことか、また、死とは何かという哲学ですね。すると、脳死問題が騒がれている現在、バイオサナトロジー学会が脳死研究会と混同されては困りますね。

土屋：全くその通りですね。当学会設立のきっかけのひとつは、医療技術の高度化によって死の捉え方が変わって来たこと、言い換えれば、生命に対する価値観が変化してきたことです。つまり、バイオサナトロジー学会では尊厳死や脳死も扱っていきますが、その前に生きていることの意味をとらえる必要があります。一言で言うと生物存在論ですからね。そのような観点から死を見つめていきたいと思っています。例えば、脳死についても、一般に植物人間と混同していることがある。脳死の定義は、脳幹も含めて全ての脳が死に至



るわけで、米国のカレン・クインランのような植物人間は脳の一部が生きているものです。いくら意識がなくなっても、植物状態は脳死とは違って死とは考えないという立場の医師が主流です。このあたりの問題をバイオサナトロジー学会でも、もう少し明確にしていきたいと思います。

佐多：今後、老人社会になっていくことを考えるとますます死ぬことへの関心は高まっていくでしょう。

土屋：ええ、人間、生まれて脳細胞が発達して生きている事を自覚できるまで時間がかかります。と同時に、死にもプロセスがあるわけです。ある程度時間もかかると思いますね。その点、仏教では初七日とか四十九日とか、プロセスがありますね。

佐多：はい、神道では殯(もがり)と言って一定期間死体を安置するそうです。死に至るまでのプロセスは長いんですね。

生死とは何かを理解する

その核はDNA

土屋：そういえば、終戦まもなく小林六蔵という細菌学者が書いた『科学の統一』という本の副題が、“生存の理法”でした。幾何学と腸内細菌をモデルに、細菌の生存秩序の様子を理論的に解明しているのですが、DNAを予見しているような理論でした。つまり、死ぬとDNAもなくなるわけですが、受精している場合は親の固体が死んでも、子にDNAが伝わっている。生存の理法はDNAに関係があるのです。このへんが、生存とは何か、生死とは何かを理解する上での“核”になるだろうと思います。人間、生存の本質については分かりません。天才科学者ホーキングといえどもブラックホールです。ただね、ホーキングの解く宇宙論もバイオサナトロジー学会の目指す行き先も、同じ方向に向かうのではないかと予感しているのですが……。

佐多：DNA二重らせんモデルを発見されたクリック博士を一日、益子焼きにご案内したことがありまして、その時に「博士、人間をデザインしたのは結局誰ですか。」と尋ねましたら、“It’s nature”とおっしゃったのが非常に印象的でした。

土屋：GODとは言われませんでしたか？

佐多：無神論者だからと……。 (笑)

土屋：ハハハ。仏教でも、natureという考えがありますね。それが証拠に、生まれ変わりがあって、来世には道端に転

がる石だったり土だったり、無生物にもなるということですね。

生存と死の秩序とは

佐多：死の問題も重要ですが、生殖の分野でも体外受精の問題等がありますね。アメリカでは、卵子の細胞膜を薄く剥離して、精子をドッキングしやすくする薬剤も開発される等、その発展の速さに驚かされています。

土屋：生きるということは多種多様で、先進国の人とアフリカの人とでは生きている状態が違ってきます。だから、アフリカが飢饉だといっても、食糧を送れば救えるというものではないのです。生も死もそれぞれに価値観が違うわけで、これからはもっと、自然とともに生き、そして死ぬことの意義を見直していく時代になるだろうと思います。そのために科学技術的な視野だけで“生と死の問題”を追いかけるのではなくて社会システムや教育システムをどうするのかというレベルまで広げて考えていきたいものです。

佐多：バイオサナトロジー学会の発起人リストを拝見しましたが、いろんな分野の第一人者の方々が参加されていますね。八木誠一先生は、確かクリスチャンでいらっしゃる。

土屋：ええ。古川泰龍氏は仏教ですが、面白い人物です。シュバイツァ寺の住職ですからね。宗教宗派だけにこだわっている人は困りますが、ぜひ宗教家のお力も借りたいと思って参加していただきました。その他経済学者、哲学者とも協力して、個々の生死だけでなく人類全体の生死に関わる問題に取り組みたいと思っています。

生存の秩序なるものが、平和の中ではどうなるか、戦争の中ではどう作用するかをフレキシブルに考えていきたいものですね。例えば、平均余命の問題ひとつとってみても、日本を含めて先進諸国の、価値や心から鰓た余命には問題が多く存在します。これはインダストリアルストレス(高度産業化による社会的・精神的な不安。例えば、人間関係の破壊、麻薬問題、ホームレス問題等)に由来するものです。

また話しは飛びますが、危険なイメージのある飛行機より自動車事故での死亡率のほうが、実際、はるかに高いというデータがある。私にいわせれば、自動車をなくすだけで日本人の平均余命は数年延びるわけで、これほどリスクの高い自動車を全人類が容認しているのが分かりませんけどね。(苦笑)

佐多：私共の仕事からみましても、この世にバイクや自動車がなければ、整形外科や脳外科の仕事もずいぶん減るでしょう。また、ここ十年来、アースロスコブを使った関節系の手術がアメリカを中心にブームになっていますね。これも、ジョギングブームがなければこんなに騒がれなかったことでしょう。

土屋：おもしろいことに、便利というプラスがあれば危険というマイナスがある。こうしてみると、武見先生の「安定の中の不安定と不安定の中の安定、平和の中の戦争と戦争の中の平和。これは人間につきものだ。」という言葉を思い出します。この現実を直視して生存と死の秩序を探って行くのが、バイオサナトロジー学会の使命でしょう。

LOVE

高齢社会がやって来る 「安心して老いる」ための 福祉は可能か

茶の間のテレビで見る「きんさん ぎんさん」は、今の高齢化社会への関心の高まりを象徴しているようにみえる。しかし正直なところ、二人の元気な姿を見て、自分の老後生活への確信と安心感を覚える人はまれだろう。

日本の高齢者人口は現在、約1,500万人。21世紀には、その2倍に達するそうである。更に「痴呆性老人」と「寝かせきり老人」の数は現在の100万人から、3倍に達すると推定されている。このような急ピッチな高齢社会化と要介護高齢者の増加をどのように支えていけばいいのか。人は誰でも老いる。このことは社会問題であり、同時に私達一人一人の切実な問題でもある。

そんな中で、検事の堀田力氏が昨年暮、突然「福祉コーディネーター」に転身したことは大いに注目を集めた。氏は1976年のロッキード事件で東京地検検事として「首相の犯罪」を立証し、“鬼検事”として名を馳せた。新聞報道などによれば、昨年春郷里に住む母上を亡くされ、その経験が転身への契機になったということであった。氏は今、「さわやか福祉推進センター」を主宰、「ボランティア切符」の全国ネットワーク作りに全力を注いでいる。この切符は、地域でのボランティア活動を「時間預託」し、将来自分や自分の親が介助を必要とした時にそれを引き出してサービスを受けられるというものである。「見返りを期待することはボランティアではない」という指摘もあるようだが、将来、本当のボランティア社会へ成長するきっかけになれば、という意味が込められている。また、「情けは人のためならず」という日本の伝統的な相互扶助精神に通ずるものもある。

その「さわやか福祉推進センター」が、去る5月22日東京で『ボランティア切符研究会・第一回総会』を開いた。座長に、日本社会事業大学学長の三浦文夫氏、出席者は厚生省・老人福祉保健部、全国社会福祉協議会、全労済生協、連合、労働省・労政局、香川県老人福祉問題研究会、神戸ライフケアセンターなど地域の草の根

福祉団体多数。その他、オブザーバー参加として、日本生協連、生命保険会社やコンピューター関連会社の顔ぶれがあった。研究会を通じて、すでに79団体程度で実行されている「時間預託」を全国共通にするための方策を協議する、それをコンピューターにより全国



「さわやか福祉推進センター」笠尾良三氏

ネットワーク化、更に「ボランティア切符を一つの手段としてボランティア組織の普及拡大を研究」し、ゆくゆくはそのための全国的センターとしての財団法人の設立を目ざしている。

福祉サービスの内容は様々である。訪問・相談・話し相手になることから、炊事・洗濯・掃除・買い物などの家事援助、そして清拭・排泄の世話などの重介護、看護まで。サービスを受ける対象者も、「寝かせきり老人」「痴呆性老人」「身体・精神障害者」から「父子家庭」「母子家庭」等等、介助を必要としている人は多い。ところで、介護の内容をみると、医療との関係の深さに気付かせられる。堀田氏の協力者として「さわやか福祉推進センター」で活動されている医事評論家の笠尾良三氏は、「日本の医療と介護はバラバラ。もっと連携すべきだ。」という。氏は10年来、開業医連合会で医療の問題に取り組んで来た。

「日本の開業医は、明治以来の“町医者”の伝統をもっています。国民皆保険制度とともに、長寿化に大きく貢献してきました。しかし今は、開業医自身が高齢化



して次のなり手がなくなっています。公的医療費抑制策のために老人医療費の有料化も進み、付添看護費用も増大の一途です。そのうえ看護婦さん不足は深刻です。それでも老人が病院に集中するのは、本来ならば特別養護老人ホームなどに入所していなければならないような人までも、施設が不十分なため、仕方なく病院に行くのです。新聞をにぎわすような高度医療技術も一方では医学の進歩ですが、同時に医療費を大幅に増大させています。日本の医療は治療には強い反面、介護には弱いのです。逆にスウェーデンなどは医療には弱い介護には強いと言われています。入院時医学管理料の通減制により一定期間しか入院ができず、その結果家庭介護に追いやられる傾向も強まっています。このように考えてくると、医療の矛盾のしわ寄せが介護の問題に現れているとも言えましょう。」確かに、「介護に疲れた60代の主婦が老いた母親と心中」などというようなニュースはあとをたたない。運よく老人病院に入れても「食事時間になると、青い制服の介護婦3人がオムツを替え、続く3人一組の介護夫が老人達を起こして背もたれを当てる。食事が並べられる。」(5月28日付朝日新聞)という暗い実情だ。実際、勤労者がせせせと貯蓄に励むのは、病気や老後への不安感の故と言われている。

妻が夫を、嫁が親を介護すればいいという「家族の相互扶助を基礎とした日本型福祉」は、とくに現実的でなくなっている。しかし、都会に住む長男夫婦のもとに田舎から身を寄せる老人の話は日常茶飯事だ。老人は変化に弱い。環境の変化に適応できないため、都会に出て来たことをきっかけにして痴呆症になってしまうことすらある。それでもそうせざるをえないのである。地域の「高齢者福祉センター」等のデイケアもあるが、それにむかない人もいるし、それだけで問題解決するとは誰も思わないだろう。老人がこれまでに住んでいたところで在宅

福祉サービスを受けることが強く望まれているが、公的福祉施設や公的な保険でバックアップすることは必要不可欠なことだ。「ボランティア精神は、日本人にとってどこか馴染みにくいところがあります。それは西欧的個人主義の伝統がないからです。地縁血縁関係の残る地域社会の“相互援助”にしても実際には物品のやりとりなどがあり、無償ではありません。でも、金銭の介入は極力避けようとしています。その点都会では逆かもしれません。近隣の人にはかえって頼みにくい人が多いという話も聞きます。ボランティアに対して、田舎では市町村自治体の、都会ではとくに企業のバックアップが必要なのではないでしょうか。企業でも、社会貢献活動としてのボランティア休暇制度や介護休暇制度を設けているところが増えています。地域社会に接触することで、会社人間とはひとあじ違った創造性のある優秀な人材が得られるという考えもでてきます。教育面でも、ボランティア単位制をとり入れる大学ができています。東京江東区のように幼稚園や保育園を老人ホームと併設せるとか、小中学校の課外活動やカリキュラムのなかにボランティア活動が組み込まれるようになれば、次第に介護も自然な形でできるようになっていくでしょう。」と笠尾氏は語る。

「安心して老いる」ことのできる社会は小手先のことでできない。グローバルな視点と粘り強い実践の積み重ねが必要なのである。

さわやか福祉推進センター

連絡先

品川区南品川5-3-10 ミヤデラビル5F

TEL03-5461-1923 FAX03-5461-1925

FAITH

渡辺 政直

元日本聖公会首座司教。1986年に退職後、「再度、現場の第一歩に戻り、人々への奉仕活動の道を歩みたい」という希望のもと、1987年7月、夫人とともにタンザニアのダルエスサラームに渡る。当地において、貧しい人々や、同港にある「THE MISSION TO SEAMEN」という船員のための休養施設で奉仕活動を行う傍ら、タンザニア各地の英国教会（THE ANGLICAN CHURCH）でも奉仕活動を行っている。夫人は看護婦の資格を生かし、医療奉仕活動をしている。



アフリカ便り

ムジンガ

日本は南北に延びる国で、四季が比較的はっきりしている。厳しい冬が明け春到来ともなると、樹木や草が一斉に芽を出し美しい花をつける。タンザニアは熱帯性気候の中にあるので、四季は明確でなく雨季と乾季のくりかえしである。4月から9月半ばにかけては、インド洋より吹き寄せる南西風のモンスーンの影響で涼しくなり、夜間や早朝はかなり冷え込む。それに対し10月から翌年3月頃までは、汗が吹き出るような暑さになる。

でも、一年中花の見られぬ季節などない。プーゲンビリアやハイビスカス等、涼しい季節にも結構咲いている。だが、草も樹木も暑さの強くなる9月頃になると勢いつき、花の数がずっと増えて重みで枝が垂れる程になる。アカシヤの樹は真黄色なブドウ状の花を満開にし、火炎樹は11月から12月にかけて樹木全体が真っ赤な花で覆われる。人々は「クリスマスツリー」と呼んでいる。

日本では見られない美しい花が沢山ある。時々、「この花はなんという名前ですか」と尋ねると、帰ってくる答えは「マウア」だ。「花」というわけだ。特別に名前はないが、「花」なのだ。色々な人と話をしてみても判ったことだが、タンザニアの人にとって花が美しいからといって名前をつけるまでには値打ちがない、ということらしい。それより、彼らの実生活に潤いを与えてくれる果実を生み出す樹木には、きちんと名前をつける。プーゲンビリアもハイビスカスもアカシヤも美味しい実を結ぶ樹木ではないから、彼らから見れば名前は必要なく、外来語でいっこうに構

わないことになる。

私どもの住まいの真向かいに直径60センチの大木が見える。枝ぶりが素晴らしく、大きな日陰を作ってくれるので、樹下に入ると涼しい。この樹は真っ白な花を何百とつける。濃緑色の葉から浮き出るようだ。不思議なことに、365日、一日も満開でない日はない。樹全体が純白の花を、これでもか、これでもかと押し上げるようにして、満艦飾に咲いている。教会の礼拝にこの花を飾ると、とても清楚で美しい。でも長持ちせず、たった一日で花が落ちてしまう。枝を折ると乳液がしたり落ちる。後で分かったことだが、花瓶の水を吸い上げる花ではないようだ。果実は、また、葉と見分けがつかない位貧弱な、サヤエンドウに似た恰好だ。実は、何人もの人にこの樹木の名前を尋ねてみた。知らないという人、「マウア」という人が多かった。そのうちに、「この樹は『ムジンガ』と言います。」と教えてくれる人がいた。何とその意味は『お馬鹿さん』であった。毎日樹木全体を白い花で一杯にしても、美味しい果実をちっともくれないので、『お馬鹿さん』ということなのか。

それ以来、このムジンガが大好きになった。毎朝、玄関を開けると精一杯に花をつけているムジンガが目に見え込んで来る。日中の仕事を終えて家に帰ってくると、正装した騎士の居並ぶ中に迎えられるような気持ちになる。また夜、星空の下でダイヤモンドが輝くように白く光って見える。ただの一度も満開の装いを辞めない樹。疲れを見せぬ樹。最上の美を無言の中に表して、周囲を幸せにしてくれる樹に、ただただ脱帽している。

HOPE *Bourgogne*

サン・フィリベール教会

文芸評論家

饗庭 孝男

あえば・たかお

1930年、滋賀県生まれ。甲南女子大学文学部教授。フランス文学専攻。
著書に「石と光の思想」（勁草書房）、「自然・制度・想像力」「西欧と愛」「経験と超越」「ヨーロッパとは何か」（小沢書店）、他多数。



ディジョンから国道74と6を経由し、ほぼ100キロ南下するとトゥルニユの町につく。この町には四度きたが、14年前に南のベルビニヤンから北上したときの思い出は鮮やかである。肌寒く8月の半ばとは思えぬほどで町には霧が流れていた。ところで遙かな昔にはローマ軍の城塞がここにあった。179年、聖ヴァレリアンがこの地で布教して捕らえられ、首をはねられた。今の地下墳墓にあたる場所という。最初に礼拝所（4世紀）ができ、9世紀に今の教会の基礎ができ、やがて10世紀にほぼ完成した。その間ノルマンティエからノルマンに追われてきた僧たちの奉じる聖フィリベールの遺骨もここに合祀され、やがてその名前が今日の教会の名前となる。

国道から古い家並を通ると、突然、正面に灰白色の城塞風の外観をもったこの教会があらわれる。つくられた時から後、1006年に火事があり、16世紀のユグノー教徒が図書館に大きな被害を与えたものの、いずれも修復されている。正面は975年から1000年にかけて作られたものである。^{ナルテックス}洗礼者志願室は石灰岩の石組で、力強く、三つの梁間を大地的な柱が棕櫚の葉のようにがっしりと天井を支えている。

それを眺めると、ピレネー山麓でみたサン・ミシェル・ド・キュクサ修道院の地下墳墓を私は思い出した。力感にあふれ、素朴厚重的な印象である。初期ロマネスク建築がもつ、装飾性の少ない、簡素な美しさといってよい。柱頭彫刻さえそこにはない。

身廊部分も同じ印象だ。五つの梁間があり内陣へとつづく。柱は円く、寄せ柱ではなく、殆どそのままに太く床から半円アーチを描いて天井を支える。石灰岩のためか堂内は明るい。秩序と均衡の比類のない印象である。色調はことなるが、カタルーニアのサン・ヴィセンテ、ラングドックのサン・ギレーム・ル・デゼール修道院の身廊と共通した装飾による感覚の欽びを排してただちに神に向かうという方向性を人々に与えるのである。

上部半円アーチの支えにはイスラム風の濃淡ある色調の交替があり、その点ではブルゴーニュのサント・マドレーヌ教会と類似している。内陣の周歩回廊には単純な葉模様の柱頭彫刻があるが、中世よりもむしろ古代的な印象である。

私はこの身廊から洗礼者志願室の上にあるサン・ミシェル礼拝堂へと上った。この空間の石組は粗い。しかも壁面の色調は身廊とことなっていて暗いのだが、高いところに十字架形の窓、その下に二つの直方形の窓があるため、部屋全体はさして沈鬱な感はない。十字架形の窓は時折見られるが、私はイタリア、ロンバルディア地方のサン・ミケーレ教会の壁面に穿たれているのを思い出した。まさに「十字架の光」である。

かたわらの門に不思議な浮彫りの人像と植物文様がある。何を意味しているのか不明な、謎めいた微笑をうかべるこの人像は土俗的で呪術的でさえる。それはこの礼拝堂を守護するためのものであろうか。あるいはただ単に「遊び」の意味であろうか。中世

人の思考にはいつも神秘をとくように促す働きがある。

私はこのサン・ミシェル礼拝堂を下りて回廊の方へ行った。大きい空間であるが、廊下の天井を支える柱は思いの外に低く、厚い。回廊が囲む中庭の隅に立つと教会の高い塔が視界の半ばを区切る。中庭の樹の濃緑色と塔の灰白色、曇り空が作りだす、落ちて着いた世界だ。最初きた時はパリを出てスペインへ車でゆき、ふたたびフランスに戻ってくるという長い三週間の旅もおわりの時であった。夏も去っていくという思いが一方また胸にあった。光は熱気を失い、人々は久しぶりにおのれの「内部」に身をかがめるようになる。回廊をひとり歩いていると、かつての修道士の黙想がわが身にあらわれるようにも感じられた。回廊を歩くこと、その巡りは求心性をもち、「内部」へ「内部」へと心が深まってゆく。

このサン・フィリベール教会の回廊に佇むと、この私にはいつもその最初の思いが昨日のように蘇ってくるのであった。トゥルニユはまたブルゴーニュ・ロマネスク教会を旅する南からの出発点であり、さらにディジョンのサン・ベニーニュ教会とならんで最古の教会の一つでもある。

それから幾度も私はこの教会へやってきたがその日の印象は何よりも忘れがたい。三度目の時は、あるグループの講師としてきた。それまでの一人旅とはことなっていていいホテルに泊まることができた。オータンのサン・ラザール教会をたずねた夜もそうだった。私は久しぶりにレストランでブルゴーニュの葡萄酒を心に沁るむような思いで味わった。クロ・ヴァンジョやミヤサーニュ・モンラツシエ、ポマール等の銘酒を傾けながら川鱒やエスカルゴ、そして「葡萄酒煮込み」を食べた。留学生の頃、こうした酒は通訳で商社の会合についていったときしか味わったことがなかった。心地よい酔いにブルゴーニュの夜はふけていったのである。

Château de Chailly

シャトー・ドゥ・シャイイ

16世紀のルネッサンス様式のシャトーを改装したホテルです。現在、ゴルフ、リゾートクラブ会員として日仏友好会員を募集しております。ルネッサンス・シャトーを軸として、何世代にも渡る日仏文化交流にご興味をお持ちの方はお問い合わせ下さい。

問い合わせ先: ㈱佐多商会 フルゴーニュ事業部
TEL: 03-3586-8873 (東横ビル内) 担当: 岩 沢

